

爾來會務は着々として進轉し、幾多の成果を収めつゝある。

その詳細なる報道は後記の各部報に譲つて、茲に些か吾人の心境を記述するに、今次の事變は、皇室の御稜威と、皇軍の愛國精神に燃える血み泥な奮闘が、克く銃後の強靱な結束と相俟つて、世界聖戰史上稀に見られる成果を収めつゝあるも、その後に来るべく對支文化工作の任務は、東洋平和確立上極めて重要性を有するものである。而もその大任は偏へに宗教家の雙肩にかゝるものであり、就中立正安國を標榜する宗團人は特に此の大任の本質を熟考し、確實な認識を以て實踐に乗出さなければならぬ。

宗祖の膝下に育れつゝある祖山學徒にも、將來如上の大任を分擔する重大な責務を課せられつゝある事を考察する時、三・五・八歳の修學期間は如何に大切であるか、今更贅言を要しない。吾等は單なる知識探究のみに止まつてはならない。信心爲本二道精通は一家の鐵則であり、大乘的な慈悲・信念・識見・迫力等の精神的要素が調和的に融合して高邁なる人格に統一せられ頑健なる肉體に具現する時、始めて時代の要求する處の宗教家が完成されるものである。祖山學徒の修學は茲に標準を求めて切磋琢磨の努力を盡さなければならぬ。

自治行政機關たる同窓會の運用も、今且く在延學徒に約して考察する時は、如上の理想實現に資してこそ、本會の存在意義が發揮されるものである。されば學徒各位は、克く本會の本質的使命を認識して之を有効に運用し、以てその性能を萬全に發

現せしむる様に努むる事が必要である。

終に臨み、本年度は本會に於ても戰時の反映で波瀾の多い歲であつたが、幸ひに會長現下を始め、各部長先生並に諸先生、本山當局の御指導と、先輩諸師、有縁各位、會員諸兄の御後援を得て大過なく會務の大半を遂行する事を得て感激に絶えず、以て滿腔の謝意を表するものである。

(下邨生記)

## 各部記事

### ◇庶務部

四月廿一日 選出された吾々は順次定期大會の準備をなしつゝ、當日を迎ふ。

四月三十日 第廿七回同窓會定期大會を本學院の講堂にて開催す。午前十時、難波庶務幹事開會宣言、先づ柿沼教授副會長代理として訓辭あり。次いで正副議長決定(議長松木教授、副議長中條教授)直ちに各部の経過報告。引續いて之に對する質疑應答、若干の質問あるも松木議長の痛快なる司會に依り至極順調に進行して間もなく終了す。次いで舊幹事を代表して難波舊庶務幹事の解任挨拶があり、引續いて下邨新庶務幹事の就任の辭があり、ついで下邨庶務幹事本年度豫算案を

説明し、豫算討議は至極順調に通過す、建議案はなく、緊急動議に移り、中學林同窓會編入の件につき高二河端君より提案す、會員の一部に強硬なる反對意見が生じて議場騒然化し、事態の收拾容易ならざる觀を呈せり。仍て松木議長の發案に依り、委員付託に決して各級より委員二名を出し、晝休を利用して委員會を開催す、その決議事項を午後の大會に付して賛否を採り、教師課及會員多數の協賛を得て遂に中學林の同窓會編入の件は可決さる。續いて種々有益なる希望案の提出あり、議事萬了し、議長解任の後、下邨幹事の閉會宣言を以て大會の結末を表す。時に午後三時。

正副議長兩先生並外諸先生及會員諸兄の御授護を全して、大會を有意義に開催し得た事は、吾々幹事一同の深甚なる感謝にたえざる所である。猶前幹事諸兄の勞を謝し、左に芳名を列記して滿腔の敬意を表す。

庶務部(幹事長)齋藤貫城君 (八月出征)

難波智龍君 (後)

運動部 齋藤威遼君

辯論部 難波智龍君

高野教誓君(難波幹事庶務移任後)

難波智龍君(高野幹事十月出征後)

文學部 穗坂眞彌君

助手 熊谷海善君

會計部 米村智淨君

購買部 清水文要君

助手 香川英頂君

四月三十日 學院助教教授岩田堯親先生は今般應召さる。本日大

客殿に於て壯行式舉行し、本會より淨資を捧呈す。

五月一日 岩田先生身延山を出發するに付き、會員一同驛まで見送り激勵の辭を捧ぐ。

五月二日 文學部、購買部の助手候補者を決定す。四日選舉を行ひその結果米澤君文學部助手に、上田君購買部助手に決定す。

五月三日 本年度各部長決定(前記の如し)。岳籠遺足につき竹

谷運動部幹事と身延案内所に行き種々熱議(以後數回に及ぶ)

(運動部參照)

五月五日 各部長に御慰勞を捧呈す。

五月六・七・八日 山門前にて道路布教の法陣を張る。(辯論部參照)

五月九日 先輩重盛快哲師出征につき祝電を發す。岳籠遺足に付き學院當局より許可せらる。

五月十二日 昨年度卒業記念寫眞成り、直ちに各卒業生に發送す。

五月十四日 中學林同窓會編入につき豫算の再度編成を行ひ、

各級の委員會に付し、悉く可決さる。

五月十九日 立正中學五年生、教師課一行七十餘名來山。熊谷、

香川兩幹事驛まで出迎ふ。田村、竹谷兩幹事思親閣まで案内

す。武井坊に宿す。翌日歸京につき清水、香川兩幹事驛まで見送る。

五月廿六日 遠藤敬頭御尊父が今般入寂せられ、本日御通夜につき下邨、田村、清水各幹事十如房まで出張して回向を申上ぐ。翌日御葬儀に際し、下邨幹事參列して弔辭を捧讀し香資を捧ぐ。

五月廿八日 嶽麓旅行を舉行す。〔運動部參照〕

六月三日 平賀僧正登山されて施餓鬼會を舉行し、本會へ莫大な芳志を賜與さる。

六月四日 敬頭先生より本會へ芳志を賜與さる。

六月十一日 第一學期雄辯大會開催。〔辯論部參照〕

六月十五・十六・十七日 宗祖御入山開闢會並祖廟中心法主即管長制度實現奉祝大慶典を記念して、山門前に於て大々的に道路布教を開催、多大の法益を收む。〔辯論部參照〕

六月十九日 第一學期庭球大會〔運動部參照〕

六月廿日 元庶務幹事田邊正知師登山され、本會に芳志を寄贈さる。

六月廿七日 棲神原稿依頼狀發送す。

六月廿八日 厚德寮生の大半が流行病に胃され、本日より休暇となり、第一學期の試験は八月下旬に延期さる。

〇月〇〇日 田邊正知師出征につき祝電を發す。

七月二日 武智實靜師（校友）晋山式につき祝電を發す。

〇月〇〇日 會員香川是光君（高三）出征にて歸郷す。下邨、清

水兩幹事驛まで見送り、淨資を進呈す。

〇月〇〇日 先輩小川龍聰師出征にて歸郷す、下邨、清水兩幹事驛まで見送り、淨資を進呈す。

七月廿日 暑中見舞發送。

同日 會員宇佐美鍊昌君（高三）日蓮宗並身延山中支派遣宣撫員となり渡支するにつき身延山を發す。下邨幹事驛まで見送り淨資を進呈す。

八月廿一日 第二學期開校式舉行。翌日より五日間第壹學期試驗執行。

八月廿四日 會員大森君（高一）入營の爲身延山出發。田村、

熊谷兩幹事驛まで見送り淨資を進呈す。

八月廿八日 先輩村上顯養航空兵中支にて活躍中今般戰死さるゝにつき悔狀を發信す。

九月五日 第二學期劈頭の幹事會を開催し、今學期中の豫算及び會務遂行の方針を確立し、各部緊張し邁進すべく誓合ふ。

〇月〇〇日 先輩横山是昭師出征さるゝにつき祝電を發す。

九月十日 全會員舉つて勤勞奉仕す。荒れはてた學校々庭も一新するに至る。

九月十一日 宗務役員諸聖より一金二十圓也を賜與さる。

〇月〇〇日 會員穗坂眞彌君（高二）出征の爲身延山を出發。

全會員驛まで見送る。淨資を進呈す。

〇月〇〇日 本會運動部長林是幹先生出征さるにつき、午後一時より大客殿に於て壯行式を舉行し、淨資を捧呈す。先生

は厚德寮の前副舎監にして、學院の教練に盡力せられる事甚大であつた。翌〇〇日身延山發、全會員一同驛までお見送申上ぐ。

十月一日 勅額拜戴記念會なるを以て山門前に於て道路布教を行ふ。辯士多數莫大の法益を收む。(辯論部參照)

十月四日 東京身延參拜團登山、本會に芳志を賜與さる。

十月七日 會員時澤存昭君(高一)逝去す。弔電を發してその冥福を祈る。

十月八日 林先生の後任として運動部長に灘土惠教先生就任せらる。先生は學院出身にして、今次の事變に於ては昭和の辨慶と謳はれし豪膽の師。林先生の全課目を引繼れて、今後學院に教鞭を採らる。

同日 午後より第二學期庭球大會開催。

十月九日 第二學期劍道大會開催。(共に運動部參照)

十月十二日 例年の通夜説教は、今般釋迦堂普請中に付き、祖師堂に於て七時の法要直後十一時近くまで行つて終る。

十月十四日 會員豐田濱雄君(中三)逝去につき弔電を發して冥福を祈る。

十月十五日 午後六時より第十三回秋季聯合雄辯大會を身延町公會堂に於て開催す、雨天にも拘らず大盛況にて同十一時終了。閉會後、參加校各辯士を招待して盛大な歡迎慰勞會を催す。(詳細は辯論部參照)

十月十六日 先輩村上一等航空兵の本葬につき弔電を發し、香

資を進呈す。因みに同君は在學時代はスポーツ萬能選手にして、昭和十年中等部を卒業、享年廿三

十月十七日 甲府市制祭に際し、辯士數名出張して道路布教を開催。(詳細辯論部參照)

十月廿八日 漢口陷落祝賀法要(午前十時より祖師堂にて)引續いて立正大學教官今村嘉吉大佐の時局に關する講演あり。

午後一時より全町を擧げて旅行列を行ふ。

十月三十日 下邨幹事、會の用事に於て甲府出張す。

十月卅一日 臨時幹事會を開催。今般文學部熊谷幹事・米澤助手等來春早々入營する事に決し、後任助手の銓衡につき協議す、中五帶金君に内定す。

十一月二日 蓮盛房前任職入寂につき下邨幹事葬儀に參列し、香資を進呈す。

十一月六日 先輩谷川寛徳師の晋山式につき祝電を發す。

十一月十一日 中三小林是淳君入營の爲歸省す、下邨幹事驟まで見送る。

同日 中二生一同大宮在の天母山に旅行す。會より應分の補助を出す。(引率者至住先生)

十一月十二日 中一生一同は下部及び毛無山に旅行す、會より應分の補助を出す。(引率者至住先生)

十一月十五日 立正大學に於ける各大學、高、專學校聯合雄辯大會に、高參離波君、同大住君を派遣す。

十一月廿日 中四小屋舞一君入營の爲歸省する、熊谷幹事驟ま

で見送る。

同日 峡南野球大會に我祖山チーム善闘して四連覇を實現

する。(詳細は運動部参照)

十一月廿一日 高參押田郷藏君入營の爲に歸省する、會員多數

車庫まで見送る。

以上が榎神發行前迄に於ける部業の大牛である。之より任期満了までは五ヶ月ありせいゝ熱意を以て盡すつもりである。

### 出征軍人 入營軍人 に送る 辭

今次の事變勃發してより茲に一有半歳、東亞安定の聖的使命を達成すべく敢然と奮起した皇軍の精銳は到る所に勇名を轟かして、南京に打續く武漢三鎮の陥落等空前的な偉績を収めつつ聖業成就を目ざして邁進してゐる。げに雄々しくも尊い吾が同胞勇士の姿である。

さて茲に吾々は、本會員中より榮ある應召を得て曠野に轉戦する勇士の芳名を列記して其の勞苦に對して滿腔の謝意を表するものである。

#### 出征軍人 芳名 (○印は本學年度出征)

- 林 是 幹先生 加藤 鍊 明先生
- 岩 田 堯 親先生 齋 藤 貫 城 君
- 香 川 是 光 君 松 岡 政 雄 君
- 高 野 敬 誓 君 ○穗 坂 眞 彌 君

次にやがて第一線に立つて活闘すべき重責を帯びて、今般入營の榮譽を獲得せられたる勇士の芳名を列記して厚く祝禱の意を表するものである。

#### 入營軍人 芳名

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 大 住 快 仁 君 | 日 野 正 留 君 |
| 押 田 郷 藏 君 | 熊 谷 海 善 君 |
| 大 森 都 夫 君 | 米 澤 是 忠 君 |
| 玉 田 一 男 君 | 鈴 木 信 經 君 |
| 小 屋 舜 一 君 | 小 林 是 淳 君 |
| 望 月 六 博 君 | 後 藤 博 君   |
| 原 田 鐵 雄 君 |           |

(各銀杯一個を贈呈す、大森君は都合により淨志を進呈す。)

### ◇ 會 計 部

自然社會と構成社會の何れを問はず、これが活動發展の根源は資財の多少如何にかかる。随つて如何なる社會團體の生活に於いても、何等かの形を以て會計といふ一部門を設けざるを得ない。ここに會計といふ憎まれ役が存在するわけだ。

學院制度の改革により一時縮小したる我が同窓會も、今學年は中學林生の包含に由りて再び之が擴大せられ、隨つて本部に於ける資財の蓄積融通も潤澤を得ることゝなつた。

日支事變下に於ける國家方策に則り、各部に對しては可能な限度の節約を乞ふた。何んとなれば一事業に於ける出費を僅少し、以て一定資財のもとになされる事業のより大なるものを切望したからである。各部に於いては緊縮經濟なるに反比例し粉骨碎身、實に華々しき活躍をせられたことは今更此に言ふまでもない。然しそれは本部報の趣旨にあらねば省略することにする。

今や本年も餘す處僅となり、部業も滞り無く遂行しつつあるが、これ偏に各部長諸先生を初め、各幹事會員諸兄の御後援に依る賜と、茲に甚深の感謝の意を表するものである。

同窓會への寄附者芳名

庶務部へ

- 一金拾圓也 遠藤 是 妙先生
- 一金貳拾圓也 宗 務 院 殿
- 一金參拾圓也 平賀 實 榮 殿
- 一金五圓也 荒木 義 榮 殿
- 一金參圓也 岡 觀 修 殿
- 一金貳圓也 小島 鍊 戒 殿
- 一金貳圓也 亀口 龍 謙 殿
- 一金貳圓也 田邊 正 知 殿

文學部へ

(十一月マテ)

- 一金拾圓也 祖山學院校友會 殿
- 一金貳圓也 半澤 海 學 殿
- 一金參圓也 中谷 敦 海 殿
- 一金壹圓也 井田 正 信 殿
- 一金壹圓也 新 玉 屋 殿
- 一金壹圓也 熊 王 堂 殿
- 一金壹圓也 山 田 屋 殿
- 一金壹圓五拾錢也 望月 寫 眞 館 殿
- 一金貳圓也 田 中 屋 殿
- 一金貳圓也 加藤 案 内 所 殿
- 一金貳圓也 松 司 軒 殿
- 一金貳圓也 中 野 昇 殿
- 一金五圓也 山梨縣日蓮宗布教師會 殿

辯論部へ

- 一金貳圓也 蓮 盛 坊 殿
- 一金拾圓也 東都參拜團御中
- 一金五圓也 神 保 殿
- 一金壹圓也 丸山 は つ 殿

◆ 辯論部

言論は思想の花でありあらゆる文化文明の實は此の花によりて

結ばれた事は、東西古今の歴史が明らかに物語つてゐる。佛陀金口の所説が八萬四千の法門となり今日社會に及ぼしてゐる恩恵は絶大なものであり、宗祖又法華經色讀せられ永安國の正義を絶叫し正邪に迷へる衆生を啓蒙され、ひいては今日吾國の興隆發展に偉大なる貢獻をなしてゐる事も明らかである。

我等祖山學徒は宗祖の膝下に於て、朝夕行學二道に勵み他日「二陣三陣續け」との宗祖の遺命を奉じて布教戰線に活躍すべく止暇斷眠の精進を續けてゐる。

敎家の生命は申す迄も無く布教である。祖山辯論部は此の意味に於て重大なる使命を持つてゐる。かかる重責ある該部幹事に不肖私が無力無經驗をも顧みず就任した事は光輝ある辯論部史に對して慚愧の念に絶へぬ所である。然し「延びんとするには先づ届す」例の如く此の縮少により、更に大なる膨脹發展されん事を心より願望する者である。時恰も戦時体制下にあつて祖國日本は八紘一宇實現に立上れる時、宗門に於ては祖廟中心制度確立され本化門下は四海歸妙の成佛國土建設に向ひ立正報國の精神のもとに奮闘すべき絶好の時を得て、本辯論部も耕辯會に山内説教に將亦街頭に進出して、宗祖大上人の御庇護並に松木部長先生の御指導と會員諸兄の絶大なる後援の下に大過なく該部の重責の大半を終了し得た事を感謝し併せて本年度の足跡を報告する次第である。

四月廿八日 前幹事難波兄より事務引繼完了。  
五月六日 釋尊御降誕會道路布教開演。

所 身延町山門前 辯士左の如し

清水 幹 事 宇佐美 鍊 昌 君  
難波 智 龍 君 田 中 靜 光 君

五月七日 同道路布教並映畫會

所 山門前

下 邨 顯 淨 君 宇佐美 鍊 昌 君  
難波 智 龍 君 松 木 部 長

映畫：身延山ニユース、宗祖御一代記 説明丸山布敎師

五月八日 同前 同所

米 村 智 淨 君 清 水 幹 事  
下 邨 顯 淨 君 難波 智 龍 君  
宇佐美 鍊 昌 君 丸 山 布 敎 師  
武 田 先 生 松 木 部 長

三日間の道路布教は天候に恵まれざりしにもかかはらず辯士諸氏の奮闘に依り盛大裡に終了す。

映畫布教に於ては特に丸山布敎師の御盡力を深謝す。

五月十四日 耕辯會並に説教儀式開催。

説教 帶金、香川、米澤、厚海、田中。  
耕辯 勝山、小林、上田、齋藤、阿部、丘。

右の如き形式に於て毎週土曜日に耕辯、説教を開催す。

六月四日 山門説教出張

清水、宇佐美、難波、三君。

六月七日 大善坊説教出張。

六月十一日 校内各級選出春季雄辯大會開催す。當日のプログラム左の如し、

一、開會の辭

清水幹事

一、母性愛

中學林一 幡野良仙君

一、今事變下に於ける本化學徒の急務全二

阿部東洋君

一、所感

中三 望月六博君

一、戦は吾等覺醒の時也

中四 大橋玄晃君

一、所感

中五 香川英頂君

一、佛教を白眼視する當局者に訴ふ

高一 細井利行君

一、支那事變觀

高二 新津義尙君

一、日蓮上人の魂を体得せよ

高三 横山持教君

一、批評訓辭

部長 松木先生

一、閉會の辭

下邨幹事

六月十五日より三日間開會説教出仕。同宗祖御入山記念並に奉祝祖廟中心制度確立の道路布教開催す。

六月十五日 雨天なりしも二王門内に於て開催。

清水 幹事 望月海順君

下邨 幹事 宇佐美 鍊昌君

田中 靜光君 松木 部長

六月十六日 道路布教。

清水、下邨、小林、難波、宇佐美、津田師、武田先生、松木部長。

生、松木部長。

本日東京市大本願中野氏より辯論部に對し金一封を下さる。

六月十七日 道路布教。

下邨、田中、難波、小林、宇佐美、丸山布教師、清水。

七月七日

蓮盛坊説教出張。

難波、大住、宇佐美、三君出仕。

七月十六日

大善坊出張。

七月二十三日

總門發軔開祭典説教出張。

九月十日

説教プリント發行す。

十月一日

勅額拜戴記念道路布教。下邨幹事、牛崎海勇君、望月海順君、齋藤威順君、難波智龍君、田中靜光君、武田先生、灘上先生、大住快仁君。

十月十二日 通夜説教出仕。

本年は釋迦堂増築中につき午後十一時迄祖師堂に於て行はる

十月十五日 第十三回秋季聯合雄辯大會開催す。

參加団体 立正大學 日本大學 立正學院(大阪) 池上學院

祖山中學林 本化同心會 男女青年團

當日審査員諸先生を左の如く御願す。

審査長 柴田頤秀學監

松木本興先生

今村是龍先生

灘上惠教先生

有光友逸先生

プログラム左の如し。

- 一、支題三唱
- 一、開會の辭
- 一、幹事 清水文要君

◇優勝カップ返還式◇

- 一、審査員挨拶 本學教授 今村是龍先生
- 一、黎明の叫び 中學林 原田鐵雄君
- 一、支那事變下に於ける我等の覺悟中學林 高橋英正君
- 一、或る女の死 本學 小林是淳君
- 一、國民精神總動員 下山青年 遠藤敏夫君
- 一、出でよ時代の宗教家 日本大學 我妻岩吉君
- 一、法華經の時は來れり 本學 黒宮教文君
- 一、小さき存在の叫び 女子青年 藤田みつじ嬢
- 一、我徒の覺悟 立正學院 吉田學量君
- 一、吾も又男子なり 身延青年 秋山米二郎君
- 一、八紘一宇の理想の下に 本學 帶金一義君
- 一、苦惱の中より 池上學院 佐川寶敬君
- 一、世界は日蓮なり 同心會 村田海仙君
- 一、日蓮主義の人格完成と誓願生活 立正學院 川上觀慧君
- 一、農村青年の使命 本學 細井利行君
- 一、汗と信念に生きる者 身延青年 田中萬造君
- 一、獅子奮迅の姿 立大專部 河村圓敬君

- 一、攝受折伏時に依るべし 日本大學 内海龍觀君
- 一、身延人に訴ふ 同心會 片田爲丸君
- 一、奉仕の一念 本學 竹中仙一君
- 一、人類の歴史は連繫的犠牲に基く 立大豫科 佐藤辨修君

- 一、事の戒法 本學 信田運連君
- 一、法華經行者の信念と覺悟 本學 長谷川泰温君
- 一、あれかこれか此の動きの中に見よ 本學 田中泰勵君

- 一、改造か創造か 立大學部 岡部君
- 一、優勝カップ授與式◇ 辯論部長 松木本興先生
- 一、挨拶 幹事 下邨顯淨君
- 一、閉會の辭 同
- 一、玄題三唱

審査の結果左の六君が優勝準優勝の榮冠を獲得された。

- 本學 優勝(カップ授與) 高 二 竹中仙一君
  - 同準 優勝(賞品授與) 高 三 田中泰勵君
  - 他校派遣優勝(カップ授與) 立正學院 吉田學量君
  - 同準 優勝(賞品授與) 立正大學 岡部君
  - 男女青年優勝(カップ授與) 田中萬造君
  - 同準 優勝(賞品授與) 片田爲丸君
- 廿五名の辯士は戰時體制下に處する我等の信念の歸依所を遺憾なく吐露す。本大會に際しては部長先生、本山布教部、審

査諸先生及び各參加婦士の御盡力を感謝致しますと共に尙大會に際し御奉仕下された會員諸兄並に梅屋旅館御主人、身延印刷所に深謝申し上げます。

十月十七日 例年雨に苦しめられた甲府市制祭特別道路布教も本年は晴天。一行は牛崎海勇、大住快仁、齋藤威遼、清水幹事の四名で晝夜二回に亘つて太田町公園の廣場に於て法陣を張り聴衆ひきまきらず盛大裡に終了した。

右催しに際しては特に鹽田先生並に山梨縣布教師會より絶大なる御支援をかたじけなうした事を厚く御禮申上ます。

十月二十九日 二王尊祭禮説教出仕。

丸山布教師、清水幹事。

十一月十五日 立正大學雄辯大會に高三難波智龍君、大住快仁君を派遣す。

宗教の理想境

難波君

何が人間世界をこうさせたか 大住君

第三學期

宗祖御降誕會雄辯大會を開催す。

## ◇運動部

竹谷生記

運動。私は特に我國古來の武道と、外來の所謂スポーツとを同じく此の範疇に入れたい。何故なら武道とスポーツとはその型次に於て、一は堅苦しく、一は自由であるにも拘はらず、共

に身體を練磨、精神を鍛へる事に於て同一だと見るからである。現今の科學の發達は事物を分拆し、或は綜合して現象の眞を精細に穿ちつゝある。然して我々の身體の複雑なる形質、それは一體如何なる微妙な作用を爲すものであるから研究されて居る。生理の學理が精細に究められれば、それに伴つて此の事も又精細にされるが此れを實際に活動し體驗し得るものはスポーツを置いて外にはない。されば競技は身體のリズムに緊張味に又部分的に等、配合的に試みられる。其れは丁度學者が眞理に就いて苦悶し、其處に樂しむと似たものがある。

「剛健なる精神は、剛健なる身體に宿る」と云ふ言葉がある。之れは身體が弱ければ意志が薄弱であるといふ反面を云つて居ると思ふ。然しそれ以上に、スポーツをやり抜くには何より先に氣魄が必要である。身體に先立つての氣魄である。私は、弱身の人が、何かして丈夫になりたいと、朝日を浴びて冷水摩擦をして居る姿を想像する。此の人の氣魄こそスポーツの精神である。

私はスポーツの眞を身體の剛健如何よりも、氣魄の點に見たい。吾等は情熱に燃えた潑刺たる氣魄を以て終生生き通したい。永遠の若人たりたい。此の氣魄を以て宗教家として生きると共に、一方身體の強靱を求め、眞理に憧れる心は此處にも肉體の微妙なる作用を知り、其處より發する靈妙な力強き美しさを樂しみたい。運動し過ぎて身體を害すと云ふ人があるが肉體の節理を忘れてはならない。目指す處は肉體の完全なる肉體の働き

に至るにある。疲勞を回復し軽い運動をする事は勿論結構である。然し若き情熱に燃える者は唯それだけでは満足出来ない。必ずや肉と靈の交叉する深い／＼鍛錬を求めらるるに違ひない。私自身野球をやりつゝ、又他の部をも幹事として擴充發達させようとしたが、その成績のあがらざるを自ら省りみて深く愧ぢたい。

終りに、運動部長林是幹先生が名譽の應召をされ、九月二十八日全學院、全町の歡呼の中に壯途に着かれてより代つて灘上先生をお迎へした。林先生多年の御勞苦を感謝し、合せて新部長先生の今後益々我々を勵まされん事を御願ひして、筆を擱く。

◆劍道部

壹月三十日 一週間寒氣に堪へ体位向上、技術の練磨をはからんと寒稽古開催。稽古者實に二十名を數へ凌刺と寒氣風邪を蹴飛ばした。本日此期の納會試合にてその成果を發表しあつた。成績次の如し。

□紅白戦 勝——白軍

紅白軍共に好く亂れ戦ひ遂に大将の勝負にて決す。

□高點試合(トーナメント式)

一等 日野君、二等 齋藤(威)君、三等 株田君

□優勝戦

優勝 株田君、二等 齋藤(威)君、三等 前田君

秋正に超非常時局にあり、朝野擧つて体位向上健康第一を叫

ければる今日、武道精神の發揚と相俟つて當劍道部も晴天白日の野外をその道場として練磨を續けて來た。先頃機敏鋭劍を以て重鎮たりし出島學兄を送り、新星芝田、多賀、岩城、細井、大橋の諸星を迎へたが我部も正に天をつくの概がある。都合によりて春期大會取り止めの爲その好期を逸した。秋期大會は前例無き大盛會で出場劍士廿數名に上り剩へ闘志満々として床をも抜けん程だった。

十月九日(前九時開催) 戦績左の如し



九時より時間勵行せし爲幾分遅くなりし者あるも開催初めからなか／＼激戦ことに内田君の奮戦は紅軍の心配の種であつた。

□高點試合

一等 株田君、二等 岩成君、三等 増田(慈)君

□優勝戦

優勝 鈴木(新)君、二等 株田君、三等 齋藤(威) 芝田君

本山にて晝食後、午後一時より改めて優勝戦績行す。就中准々決勝に於ける齋藤(威)岩成兩君の一戦は一方大、一方小の珍景だつた。又鈴木、齋藤兩君の一戦に於て鈴木君も肘を破つて奮闘し遂に岩成君の雪辱をしたのは見事な一戦であつた。尙當日の審判を加藤要舜師に煩した事は厚く感謝する。午後三時皇國の萬歳を三唱して閉會す。

今や皇國は長期建設へ邁進して居る。我々宗門僧侶と雖も破邪顯正の劍を提げて二陣三陣續くには健全なる身体が必要だ。

正月二十二日より例年の如く寒稽古を開催する豫定。又選手を擇り南部警察署の納會に出場、身中劍道部等へ挑戦する豫定なれば今後とも期待されし。

諸兄！ 劍道をもつて益々その心身を鍛錬し堅忍不拔質實剛健なる精神を涵養し以て國家社會、宗門のためにも充分盡粹せられん事を切望して筆を擱く。

庭 球 部

我が學院運動部の最古を誇る當部も近年部員の減少に禍して昔日の盛觀なく、只春秋の二大會あるのみ。本年の春季大會は不幸に厚德寮々生の病臥に遭遇し不參加者多かりしも、林運動部長出征後、灘上新部長を始め鈴木辯論部長、今村文學部長、望月觀爾先生御來場、各級を網羅しての秋季大會は近年になき熱戦裡に終了す。

六月十九日 春季大會成績

一、紅白戦 紅軍大勝す。

一、級 戦 一位中四、二位高三、三位高二

一、個人戦

□準 決 勝

香川天ヶ瀬組 2 — 1 佐藤杉山(見)組

内田 武波組 2 — 0 三枝 丸山組

□決 勝 戦 (五回戦)

香川天ヶ瀬組 3 — 0 内田 武波組

十月八日 秋季大會成績

一、紅白戦 紅軍大勝

一、級 戦 一位高壹、二位中四、三位高三

一、個人戦

□二 次 戦

灘上部長組 2 — 0 株 田 組

幡野組 0 — 2 鈴 木 組

望月組 (不戦一勝)

□準 決 勝

灘上部長組 2 — 1 望 月 組

鈴木組 (不戦一勝)

□決 勝 戦

灘上部長組 2 — 0 鈴 木 組

望月先生組 2 — 0 天ヶ瀬組

以上の如く優勝旗は灘上部長望月先生組に授與さる。

### 卓球部

省みるに當部の存在は此の數年來躍進又躍進の著しき發展経路を示して居る。過去四年間に於ける名選手の輩出と相俟つて部員の斯道に於ける意氣軒昂たる猛練習は遂に今日の隆盛を見るに至つた。今や我が部の名聲は近くは峽南に遠くは山梨静岡兩縣下に咲き誇るに至る。之れ先輩諸氏の築きあげし苦闘の結果と深く感謝するものである。然しながら祖山の卓球部の曉將藤君の轉校こそ偉大なる大打撃である。我が卓球部を搖籃の内から育て、哭れた恩人、指導者藤君、氏の轉校こそ残念の極みである。たゞ君が残して哭れた我が卓球部をより一層堅實なるものとし益々斯道の爲に奮勵する事を誓つて君に饒けし以て君の功勞を感謝するものである。

又此處に特別大書すべきは往年の花形選手村上兄が今事變に於て名譽の戦死を遂げられた事である。謹んで故人の冥福を祈る。又當部の中堅選手として囑望された松岡、大森兩兄の榮へある入營と田口君の應召とは當部の最も痛手とするところであるが、國家の爲大いに祝し舉つて兄等の戦功と武運とをお祈りするものである。

現在のチームメンバーを見れば、主將として惑星竹中、副將として関志滿面たる意氣の鈴木、マネージャーとして古強者の増田。それに新進氣鋭の帶金、中村、遠藤等中堅選手として其

の技、將來大いに期待されて居る。今や名選手幾多去りしと雖も其の意氣と精進とを以て對外的對内的に其の名を止めて居る。

又部員として喜ぶべきは縣下にも比類無き豪華な卓球台が新調された事である。此處に卓球台の設計と新調の爲に勞を盡されし竹谷運動部幹事に部員一同厚く感謝するものである。

昭和十三年度に於ける足跡は次の如し。

#### □第三學期校内大會

梅も微笑む春麗の一日を斯して祖山の誇高き傳統を持つ校會にて昭和十三年度最初の大會を開催す。戦績要略せば左の如し  
トーナメント

優勝 鈴木君 (望月寫眞館寄贈盃)

二等 青柳君 (小友氏寄贈盃)

三等 帶金君

全 香川君

#### □第三回山靜兩縣下選手權大會

主催 祖山學院卓球部 後援 山梨日日新聞社 山梨水品會社

於身延小學校

準優勝前の戦績省略す。

#### ★準優勝戦

鈴木(祖山) 3 — 0 増田(祖山)

望月(Y.S.) 3 — 0 依田(身鐵)

#### ★決勝戦

望月(Y.S.) 3 — 2 鈴木(祖山)

龍讓虎搏の熱戦を交へしも武運拙く敗る、惜しい哉。然し敗れたりと雖も峽南の第一人者をして窮地に陥しめせしは其の意氣賞すべし、その前途囑望するに餘りある。

□春季校内大會

五月十五日に本學講堂に於て、部員一同並に飛入選手多數參加しA B二組に岐ち望月寫眞館寄贈盃並に小友寛榮氏寄贈盃爭奮戦を華々しく開始す。

A組トーナメント

優勝 大森君、二等 鈴木君、三等 竹中君、中村君

A組リーグ戦

優勝 大森君、二等 竹中君、三等 増田君、鈴木君

B組リーグ戦

優勝 村上君、二等 小山田君、三等 小屋君、

□第二回縣下男子學校對抗大會

主催 山梨縣体育協會

後援 山梨日日新聞社

山梨卓球協會

六月五日甲府高女學校コートで舉行。此の日本學代表として、大森、鈴木、増田、帶金、遠藤の五選手必勝を期して固き決意を以て遠征の途に上り參加出場す。戦績本學外は省略す。

祖山 3—2 甲 高

祖山 2—1 3 甲 中

祖山 0—3 高 工

本舞臺は第二回の出陣なれど、竹中、中村兩選手が都合あつて出場不参加の爲これに代ふるに新銳帶金、中村を以て參加出場す。甲中、高工に對しては善戦善闘せしが前年度の雪辱戦成らず再敗の血涙をのみ勇闘空しく千載の痛恨を残したりと雖も何時かはこの雪辱を期せん事を誓ふ。

□秋季校内大會

十一月十三日快晴に恵まれた絶好の日、本學講堂に於て部員一同並に參加者多數を以て、午前九時半より試合を開始す。澁淵とした若人の胸には意氣と力と熱で張り切つてゐる。

何時もの如くA B二組に岐つ。

A組リーグ戦

優勝 鈴木君、二等 増田君、三等 村上君

B組リーグ戦

優勝 高宮君、二等 香川君、三等 榎原君

A B合同トーナメント

優勝 増田君、二等 鈴木君、三等 村上君、榎原君

以上

野 球 部

峽南野球大會に於て三連覇の遺業を繼承した當部は四連覇の大業を目標に山田友篤兄、鈴木彌吉郎(主將)兄、笹部守圭兄の三選手を送りし我等は、その後、新入部員荒木、鈴木(新)、幡野、村上の諸君を迎へて陣容をととのへ之が邁進に努力した。

五月中旬縣下軟式野球大會南巨摩豫選に参加、宮本青竹の兩君が缺場したとは云へ、脆くも二敗してしまつた。

かく危ぶまれた我等のスタートも、二學期に入つて漸く軌道に乗り、殊に林部長應召後、後任灘上部長の運動に對する熱心さ、望月(歡)先生と共に、シートノックに或は打撃に、その名コーチぶりは常に一同を激勵させ技術の進歩と共に部員の意氣天を衝くの概があつた。

十月十六日十九日巨摩八代鯨澤大會に参加、大明市川の二チームを撃破し、次いで縣下に名聲高き鯨澤チームと一戦、日頃練習の技量を充分發揮し健闘せり。

對 大明チーム 5——0 (勝)

對 市川チーム 9——2 (勝)

決勝戦

對 鯨澤チーム 4——4 (引分)

惜しや日没の爲引分となつたが常に有利に進行せし事は特記すべき事だ。かく熱戦裡に部員一同は平素の練習に於るより以上の收穫を得て歸山した。此の遠征に於て先輩長谷川兄の御援護を深く謝する。

□ 第九回 峽南軟式野球大會

十一月十九日(土曜日)午後一時身延中學校球場に於て舉行。幾多先輩が血と涙で以て築いた三連覇の歴史をきづつけまいと部員一同頑張る。殊に過去三年間峽南大會の華、我が軍の天才投手宮本君、本大會も今年が最後、其の胸中や如何ん!

一回戦 (十一月十九日)

祖山 不戦勝 驛前チーム

二回戦 (十一月二十日)

祖山 1 3 0 2 2 1 0

南部 1 0 0 0 0 0 1

山 信波青本原新上野木田 打數26 三振9

祖 鈴木武竹宮梅鈴木村崎荒内 得點9 四死17

部 1 7 4 6 5 3 9 8 2 安打4 三振6

南 柿山山田青鈴木若深 得點2 四死3

以上の如く樂勝。後半宮本投手に變りて青竹投手よく打者の弱點を突き健闘す。

決勝戦 (十一月二十日)

祖山 0 0 0 0 0 3 A

水電 0 0 0 0 0 1 0

山 信波竹本原新上木田 打數20 三振8

祖 鈴木武青宮梅鈴木村荒内 得點3 四死4

電 2 3 2 5 1 7 4 8 9 9 6 安打3 失1

水 池田望巖市片川德淺 得點1 四死11

午後三時、祖山對富士川水電の決勝戦水電先攻にて開始。

敵一回に先頭打者ヒットあり、二回三回満塁となるに對し、我軍三回共三者凡退して振はず甚だ危まる。四回敵凡退。我軍一死後武波敵失に出で青竹中堅を抜きしより氣揚りしも無念武波二三壘間に捕手索制球に刺され怨を残す。五回敵よく攻撃して二ヒット有るに對し我梅原の四球あるのみ。六回敵二者四球に出でて後右翼前打撃に荒木右翼手の本壘遠投及ばず遂に一點を許す。我軍全員奮起扼腕、之が奪回に全力を揚ぐ。一死後好く鈴木信四球を得二死後青竹之に續き次の強打者宮本の強烈なゴロに敵左翼手狼狽後逸、鈴木歡呼を浴びて生還。敵投手交代の機を見て梅原二壘打を放つて二者生還、二點を勝越し貴重な三點を得。最終回は夕闇變遷として殆んど球見えずA付にて終了す。茲に四連覇の榮冠を飾つたわけであるが、四年連投の宮本投手の功績偉大なるを感謝するの情や切である。殊に兄は卒業期を目前に萬難を排しての出場、謹んで部員一同厚く御禮申上げる。最後に灘上部長、望月歡先生始め應援の諸士に深謝して息まない。

## ◇富士五湖旅行記

日 昭和十三年五月廿八日

コース 身延—芝川—白糸瀧—本栖湖—風穴—樹海—紅葉

台—河口湖—三坂峠—甲府—身延

踏破旅程 四十五里

中條、望月(舜)、福島、武田、望月(歡)の五先生を始め總員五十二名、それに加藤案内所、熊王寫眞屋。

靈峰富士の裳裾にちりばめられた紺碧の五湖、それは天下の遊子の憧憬所である。本會に於ける之の試は該博の資たるに其の功甚大なるものありと思ふ。又浩然の氣が養はれたと思ふ。

旅装を整へ一行五十四名が身延車庫前に集合、若鷗の如き澁刺さを新型バス二台に分乗したのは午前五時三十分だつた。時は杜鵑啼く新緑の好季、氣使つた天候もハイキング日和で朝まだきの街を疾驅するバスも軽い。狭い教室より開放された籠の鳥は若鷗の如き氣概で今日の壯途に血肉は休内に躍動する。舌端輕妙な武田先生のユーモアには爆笑! 又爆笑。之等を孕んだバスは朝日に鮮明となつた翠巒を後に飛ばす。天井に飛び上る程の撃動も今日は愉快な雰圍氣を醸し出す。

芝川迄の山路は激流岩を噛む絶壁を急カーブしつつ疾驅するので冷汗三斗。芝川よりコースを轉じてバスは一路白糸瀧へ。次第に脈を畫いて顯れ出した裾野。十萬坊ヶ原の大石寺を右に見て日興上人身延離山の往昔を回想しつつ白糸瀧に到着したのは八時廿分。

白糸瀧。大宮町驛よりバスで三十分の地點、高さ二十三米、幅三十米、附近に音止の瀧、工藤祐經の墓、駒止の櫻、曾我神社あり。

バス下車、坂を下ると名瀑白糸が熔岩質のそぎ立つた岩崖を馬蹄型に形造つて幾條とも知れぬ瀧がとどろと鳴り渡つて居る。飛沫が霧となつて肌寒い。或は岸より或は崖の割目より或は中腹より或は緑樹の陰より千の針を突き出した如く落ち鳴りどよもして水柱となり霧となり飛沫となりして朝日にきらめく壯觀さ！清冽な瀧水の流れに竹み飛瀑を背景に記念撮影する。豪快を以て鳴る音止の瀧は白糸の右手にあり、曾我兄弟隠れ岩は途中にある。曾我の仇討、富士の巻狩等の昔を畫いてバスに乗つたが瀧音が耳に泌みて離れなかつた。曠莫たる緑野の三里ヶ原に見る富士は豪快そのものである。農作物不可能な此の溶岩地帯の緑野には隨所に溶岩が動んだ顔を覗かせて居るが、色あせた躑躅が點綴して居る處で少憩十分、緑野に佇ちて毅然たる大富士に對向ふ。威容富士！皇國日本そのものゝ富士！千古不易の富嶽に人生の泡沫を思ひ曾我の英名竹帛に垂ると雖も暮影日に空しきを嘆く。透谷の文に曰ふ「且に平氏あり夕に源氏あり飄忽として去り飄忽として來る。一朝山を嚙んで一世紀没し一朝退き盡きて他世紀來る。歴史の載する處一朝毎に葉数を減じ古若むしつくとて英雄の遺魄日に寒し。……恒久不變の威靈を保つ物、富嶽よ。汝こそ不朽不死に邁き物」と噫呼！

本栖湖着十時、初夏の碧天を映じて紺碧に湖面は沈々として神祕の色を呈す。四圍の樹木の緑と汀に屹とした熔岩の赭色と碧湖とに私は原始時代の怪魚を想像した程だつた。

周圍三里五町、五湖中最も深し、鱒釣りあり、古代民族使用

の獨木船あり。鑑賞の暇なく直ちに進路。清純幽邃の精進、湍美の極致西湖には往かず青木ヶ原樹海に入る。數百種の對木が西、精進、本栖三湖畔に廣がる熔岩流の上に密生する千古斧鉞の入らざる原始林で學術的資料の豊富なこと世界屈指の由、時折は熊がノソノソと散歩に出てバス客を吃驚せしめ、亦バスとマラソン競技を演じる由、溶岩流の凸凹地に灌木の如く繁茂せるこの樹海は全く原始的な雰圍氣に包まれるが一層感を深ふせしめたのは風穴である。

風穴。千六百餘年前富士噴火の際に出來た熔岩隧道。深さ十米、長さ三町、穴中に四時解けざる水柱あり、奥に蠶卵貯藏棚あり、天然肥然物。冷氣の吹き上る穴口より臘燭の灯をたよりにして氷つた木の段々を下ること二度、横穴に出る。灯が人々の影を黒く印して天井にうつるのが五十餘名の人聲が洞中に籠ると共に無氣味である。氷つてやゝもすると滑りさうなので足に氣を付けると二尺程に低くなつた天井に頭を打つ。隨所に氷柱が立つて居る。千古の人の如き心持でふと仁田四郎が入つたと言ふ富士の人穴の地獄を思ひ出す。出口に出た時皆一様に太い息を呼吸した。

風穴迄迎ひに來た河口ホテルの番頭に案内されて樹海をぬけると視野が開けて紅葉台に向ふ長閑な雲雀丘に出る。揚雲雀が聲を響かせて初夏を唄ふ。なだらかな丘には農夫が鉞を陽に光らせて居る。ヒクニツクの好適地。自動車路より横に五丁坂を上ると眺望絶佳の紅葉台で、四里四方の樹海と本栖精進の湖が瞰

下される。實に茫洋の觀あり、雄大な景に陶然とし揚雲雀の聲を聴きつつ休憩して居ると天下も富も名譽も要らなくなる。カメラをむける者、聲を放つ者、店で買物をする者、騷然として旅は明朗そのものである。十二時船津着、河口ホテルの大客間を自分獨りで買切つた心算でふんぞりかへつて晝食をとる。

河口湖。海拔二千六百尺の高地にあり、五湖中最大にして周圍四里二十六丁、倒富士の勝地、水泳にポートに可、御屋敷の松、産屋ヶ崎の逆富士、壘石の夕映、敷島の松、淺間神社、胎内等の名勝あり。

記念撮影後、山中湖行は都合上中止にして三時迄この勝地を鑑賞すべく自由行動となり散會。三時遊子は三坂越えとなる。良くも築いたと思はれる峻峻な山路をバスは爆音を唸らせて河口を下下に眺めつつ登る。峠頂上の隧道口で少憩、最後の富士を賞す。この先に海拔一七八六米の三ツ峠の絶景がある由。隧道を出れば山腹を乾からびた白い路が樹間に山陰に隠見して果てしなく續く。曲りうねつたこの道を絶壁なす緑樹を仰ぎ乍ら砂塵を上げてバスは疾驅する。砂塵のひまに見える谿の松に懸る紫の藤の垂花も少しも搖れて居ない程静かなので砂塵は空間に屯したまゝ中々去らない。その中を次のバスは突つきるので塵埃まみれだ。藪が砂まみれになつて路端に咲いて居る。バスのエンジンが高い。薄霧が盆地に立ち罩めた頃坂路を下り盡した。黄昏がひつそりと柔烟を包み笛吹川は薄曇の中に白々と流れ、連峰は薄灰色にたゞなはり町には灯が點き出した。やゝ郷愁に

近いものを感じつつ甲府に入つた時は五時半だつた。ここで又英氣を養ふべく十時迄自由行動となる。十時過人員點呼の上分乗、活を獲た先生始め一同やんや騒ぎで爆笑を滿載、眞暗な田舎道を一路身延へと甲府の街の灯をあとにしたのであつた。一笠一杖草鞋を履いて勝地を心ゆく鑑賞した昔の旅路に比して今日文化の旅は或は興がうすく趣味僅少の嘆があるであらう。然し之れだけの旅程を僅か一日で踏破した事を思ふと歡喜愉悅を禁じ得ない。文明には文明の味がある。(完)

(K・K生記)

## ◇文學部

支那事變を契機として日本の思想界も飛躍的發展をなした。日本主義がそれだ。然し聖戰茲に一年猶餘、この日本主義が單なる民族主義に非ずして所謂東亞協同体へ向つての民族的全体主義の擡頭を見るに至つた。勿論全体主義、東亞協同体と謂つても全体の中に獨自のものを失する事なき、即ち日本は日本としての獨自性を有する所の部分は何處までも全体の中に包まれつつ、然かも獨自のものな有する處のものである。現今のゆきつまつた社會狀態を救ひ且つ東亞の暗雲を掃滅するには、この東亞協同体たる民族全体主義でなくてはならないと考へると共に是の主義が八紘一宇の大精神の顯現である事を思ふ時、吾等日蓮門徒は皆歸廣布の大旆を彷彿として想起するであらう。要

するに是の基礎とする所は精神である。人間、否森羅萬象悉く決して物質に依りて割切れるものではない。本化門徒の抱負を憶ふ。

扱われわれが文學をやリ文學によりて表現せんとするものは常に精神の高潮にあるが故にこの全体主義と文學との關係が見出される。されば文學の役目こそ精神界を開拓耕作する重任を佩びたるものであつて、古來幾多の諸賢哲人の教説、大聖釋尊所説の修多羅等の世益を想ふ時、主義精神の根本活動力として文學の必然や亦言を俟たない。

斯く考へ來つて棲神への學生間に於ける投稿者の餘りにも寡少なるを見るときその精神信念の欠漏に悲嘆せずには居られない。激瀾たる學生期、もつと／＼青年の意氣と熱との肉弾を棲神に敲き付けていゝ筈だ、時代に活目せよ。此の意味に於て又學生の親しみある棲神とする爲に「作品集」を思切つて創欄した。豊田正子の綴方教室に見える眞摯と純眞さは自己を隠蔽しない子供故かも知れないが此の作品集も自己の信念を素直に顯した青年門徒の氣概を欲したい。敲き起したい。學生の活躍欄として（之が本當の棲神作成の意義だと思ふ）この作品集の充實擴大を諸兄の努力に依頼する次第である。（熊谷生記）

文學部へ寄贈書籍

立正史學  
叡山學報  
立正大學史學會殿  
比叡山專修院叡山學會殿

部 報

信 人 松 楓 居 殿  
求 道 求 道 園 殿  
山 柿 山 柿 會 殿  
其他新聞雜誌等 各 位 殿

同窓會文學部寄附者芳名（十二月以降）

一金 壹 封 法 主 現 下  
一金 拾 圓 也 柴 田 執 事 長 殿  
一金 貳 拾 圓 也 本 山 殿  
一金 拾 五 圓 也 學 院 教 師 課 殿  
一金 五 圓 也 鈴 木 智 久 殿  
一金 貳 圓 也 永 瀧 堯 順 殿

『棲神』第廿五號

原稿募集

（切）昭和十四年八月三十日

今迄の棲神記載論説目錄を作成致します故十五號以前の棲神お持ちの方は御寄贈願ひます。尚棲神第廿、廿三號御希望の方は左記へ御申込下さい（六〇錢）

祖山學院内 同窓會文學部